

道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉える道徳科授業の工夫 ～構造的に立てたねらいをもとにした発問を通して～

那覇市立若狭小学校教諭 狩俣 一史

＜研究の概要＞

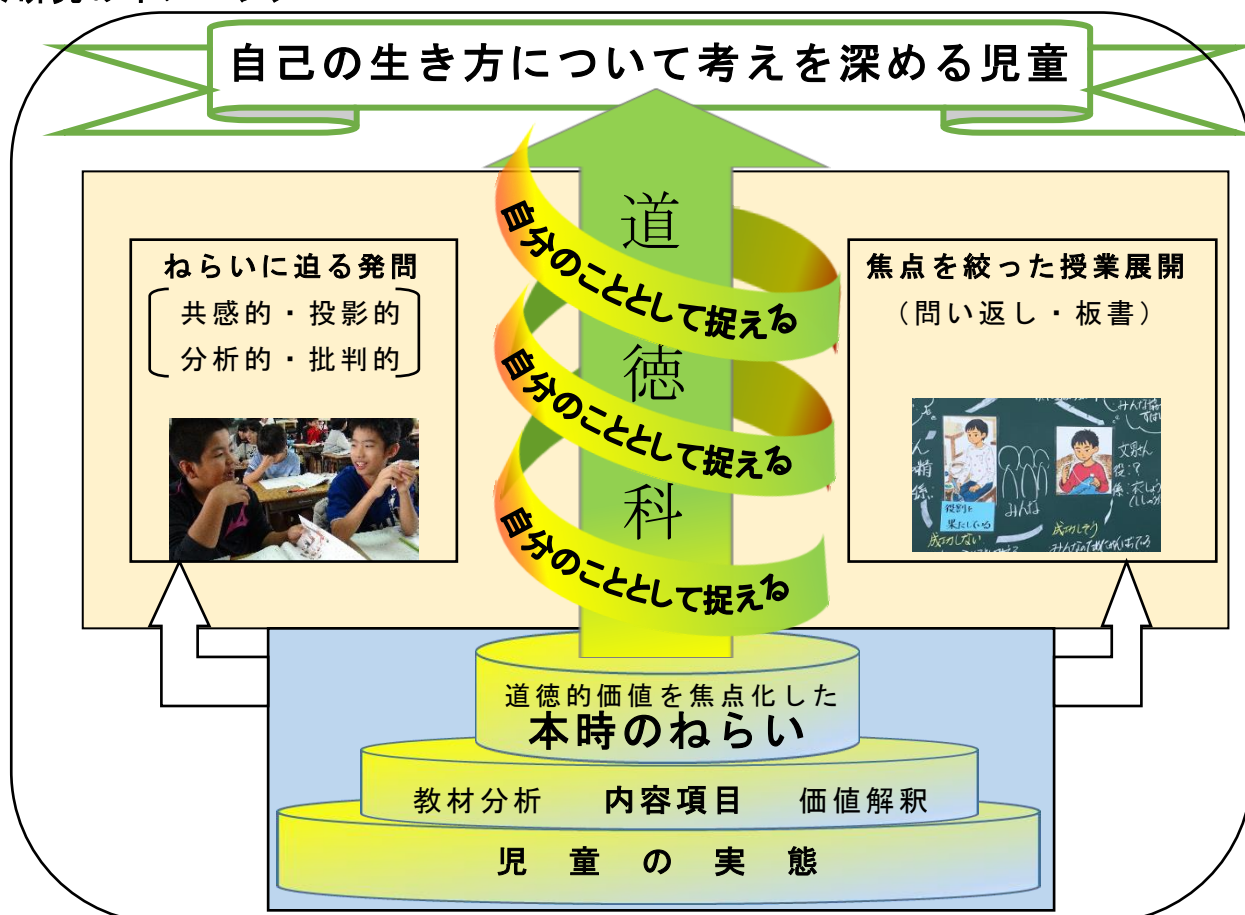
学習指導要領解説特別の教科道徳編では、指導について「ねらいとする道徳的価値について児童自身がどのように捉え、どのような葛藤があるのか、また道徳的価値を実現することにどのような意味を見いだすことができるのかなど、道徳的価値を自分との関わりにおいて捉える時間である。」としている。

そこで、本研究では、構造的に立てたねらいをもとにした授業展開やねらいに迫る発問の工夫を通して、道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉える道徳科授業の工夫について検証した。

その結果、道徳的価値を焦点化したねらい設定は、児童に考えさせたい道徳的価値が明確になり、道徳的価値を深める問い返しや板書につながり道徳的価値の理解を深めることができた。また、道徳的価値の理解を深める場において、ねらいに迫る発問を吟味し行うことで、道徳的価値を自分との関わりで考える姿につながった。

このことから、毎時間の道徳科の授業において、道徳的価値についての理解を深め、自分のこととして捉えることを繰り返すことで、自己の生き方について考えを深める児童の育成につながると考える。

＜研究のイメージ＞



I	テーマ設定の理由	41
II	研究目標	41
III	研究仮説	41
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	42
V	研究内容	
	1 道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉えるとは	42
	2 構造的に立てたねらいとは	
	3 発問について	
	(1)発問の役割	
	(2)ねらいをもとにした発問	
	(3)自分のこととして捉える発問の工夫について	
VI	授業実践	45
	1 主題名 「集団の中で役割を自覚し果たす」	
	C-16 よりよい学校生活，集団生活の充実	
	2 教材名 森の絵（教育出版）	
	3 本時の学習	
	(1)ねらい (2)授業仮説 (3)本時の展開	
	4 評価	
VII	結果と考察	46
	1 作業仮説(1)の検証	
	【結果】	
	【考察】	
	2 作業仮説(2)の検証	
	【結果】	
	【考察】	
VIII	成果と課題	48
	1 成果	
	2 課題	
	《主な参考文献》	

道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉える道徳科授業の工夫 ～構造的に立てたねらいをもとにした発問を通して～

那覇市立若狭小学校教諭 狩俣 一史

I テーマ設定の理由

学習指導要領解説特別の教科道徳編(以下道徳編)では、その目標を「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力・心情・実践意欲と態度を育てる」としている。また、道徳科の指導については、「ねらいとする道徳的価値について児童自身がどのように捉え、どのような葛藤があるのか、また道徳的価値を実現することによってどのような意味を見いだすことができるのかなど、道徳的価値を自分との関わりにおいて捉える時間である。」としている。

これまでの授業実践から本学級の児童のふり返りを見てみると、「相手の気持ちを考えながら、ルールを守るのが自由だと分かった」「場に合わせた失礼にならないあいさつが大切だと思った」など知識として理解していた。しかし、普段の生活場面では授業で理解したことと行動が伴っていない面が見られた。児童は教材の登場人物を通して道徳的価値を自分との関わりで学ぶのではなく、自分と教材を切り離して考えていたのではないかと考える。つまり、知識としての価値理解にとどまり自分のこととして捉えていなかったといえる。その原因は、授業のねらいが抽象的なため、授業展開が焦点化されず、道徳的価値の理解(価値理解・人間理解・他者理解)を深める場において、自分との関わりで考えさせる手立てが十分ではなかったと考える。これらのことから、道徳的価値を深めるためのねらいを設定し、自分との関わりで深く考えられる授業展開を工夫することが、授業改善につながると考える。

そこで本研究では、児童の実態を踏まえた教材分析とめざす児童の姿から構造的に立てたねらいを設定し、ねらいに向けた授業構成を行う。また、教材のどの部分や場面状況を切り取って発問を設定していけばよいのか、ねらいに迫るためにはどんな発問が有効かを吟味し発問構成を行う。道徳科の授業において、道徳的価値についての理解を深め、自分のこととして捉えることを繰り返すことで、自己の生き方について考えを深める児童の育成をめざし、本テーマを設定した。

II 研究目標

児童が道徳的価値の理解を深め自己の生き方とつなげながら考えられるように、道徳科の授業において道徳的価値を焦点化したねらいを設定し、道徳的思考を促し多様な感じ方や考え方を広げたり深めたりする発問の工夫を行い、実践的に研究する。

III 研究仮説

1 基本仮説

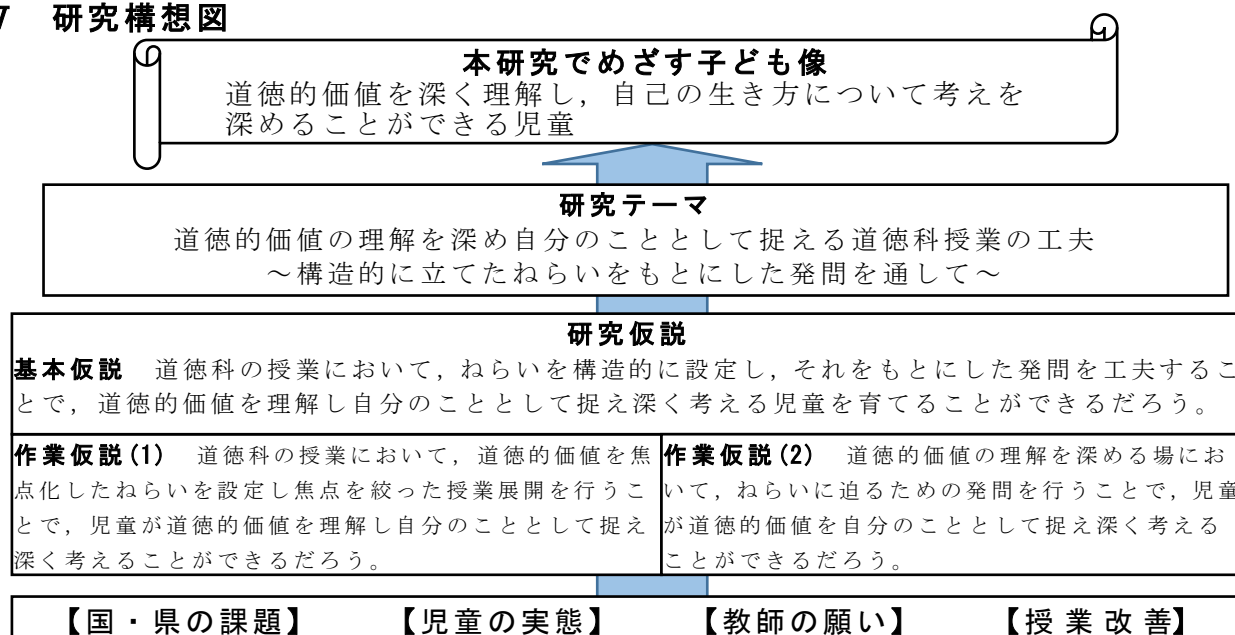
道徳科の授業において、ねらいを構造的に設定し、それをもとにした発問を工夫す

ることで、道徳的価値を理解し自分のこととして捉え深く考える児童を育てることができるだろう。

2 作業仮説

- (1) 道徳科の授業において、道徳的価値を焦点化したねらいを設定し焦点を絞った授業展開を行うことで、児童が道徳的価値を理解し自分のこととして捉え深く考えることができるだろう。
- (2) 道徳的価値の理解を深める場において、ねらいに迫るための発問を行うことで、児童が道徳的価値を自分のこととして捉え深く考えることができるだろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉えるとは

道徳的価値の理解について道徳編においては、「道徳的価値を理解するには、一つは、内容項目を人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解することである。二つは、道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解することである。三つは、道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解することである。道徳的価値が人間らしさを表すものであることに気付き、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。」と示されている。つまり道徳的価値の理解を深めるとは、人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値（価値理解・人間理解・他者理解）について考えを深めることである。

本研究では、「道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉える」を、児童一人一人が道徳的価値の理解を自分との関わりで考え、これまでの経験やその時の感じ方・考え方と照らし合わせながら、さらに道徳的価値について理解を深めることとする。

授業において道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉えている姿を、道徳編第

5章第2節を参考に設定する(表1)。その見取り方については、授業中の観察や児童のノートで見取っていく。その際、発言が少ない児童や文章に記述することが苦手な児童に対しては、他の児童の発言に聞き入ったり、考えを深めようとしたりする姿に着目し、発言や記述ではない形(表情や仕草等)で表出する児童の姿を見取る。

表1 自分のこととして捉えている姿(筆者作成)

- 道徳的価値について自分の経験を通して語り説明している姿
- これまでの自分をふり返ったり、今後の自分を見通したりしている姿
- 道徳的価値の理解をさらに深めている姿

2 構造的に立てたねらいとは

服部(2018)は、「ねらいにおいては、抽象的な道徳的価値やそれを文章に表した内容項目をねらいとするのではなく、その授業で扱う教材の特質を生かした具体的なねらいを設定すべきである。また、授業である以上、子どもが授業前から分かっていることをねらいとするのではなく、深い道徳的価値を想定したねらいを立てなければならない。」と述べている。

児童は、生活経験を積むことで、様々な価値の良さについてはすでに知っている事が多い。しかし、価値に対する理由や根拠、意義について考えたことのある児童は少ないと考える。そこで、道徳科の授業を通して児童が分かりきったことを問うような授業にならないためにも、一単位時間の授業において、児童の新たな気付きになるようなねらいを設定することは大切だと考える。

このことから、本研究においては、授業で扱う内容項目に関する児童の実態(すでに分かっている価値)を大きくりと捉え、内容項目(人としてよりよく生きる上で大切な価値)を踏まえた上で、教材分析とめざす児童の姿、内容項目の概要と指導の要点を熟考し、教材の特質によりさらに道徳的価値を焦点化したねらいを構造的に設定していく(図1)。

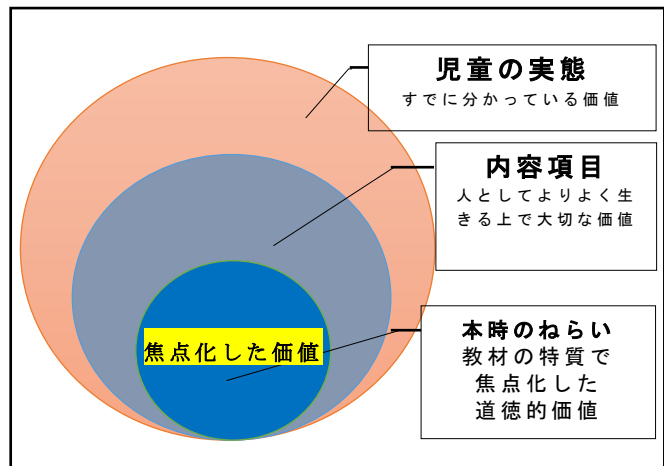


図1 価値の構造化(筆者作成)

3 発問について

(1) 発問の役割

道徳編では、発問について「教師による発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深める上で重要である。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えたりする発問などを心掛けることが大切である」と示されている。このことから、発問は児童の道徳的価値に関わる考え方や感じ方を、方向付けたり整理したり広げたり深めたりし、自分自身との関わりの中で考えるための重要な役割を担っているといえる。

(2) ねらいをもとにした発問

はじめに内容項目に関わる児童の実態(行動や考え方等)を踏まえた上で、本時で

扱う価値について解釈し理解した。次に、価値解釈を踏まえて、教材分析を行い、めざす児童の姿と合わせて道徳的価値を焦点化したねらい（表2※1）を設定し、指導の意図を明確にした。そして、ねらいの具現化のため、授業構成について考え、ねらいに迫るには、どのような発問が最

表2 発問を練るまでの流れ（筆者作成）

根拠	教材名 「森の絵」	
児童の実態	児童の一般的な価値 ・自分の役割を果たし皆で協力し活動することは大切だということ。	
学習指導要領解説	内容項目（よりよい学校生活、集団生活の充実） ・先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、様々な集団の中で自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。	
教材の特質	めざす児童の姿 ・集団を支えているのは自分たち一人一人であることに気付かせ、集団における自分の役割を自覚し責任を果たし、積極的に集団へ参加しようとする心情を高めたい。	教材分析 ・希望通りの役割になれなくてやる気が下がった主人公が、自分の希望した役割でなくても自分の仕事をまじめに行う文男さんの姿を通して、自分の役割に責任を持ち、集団の目的達成のために、自らの役割を自覚し取り組む内容となっている。
教師の願い	ねらい（※1） ○人は、集団の中で自分の思い通りにいかなかったときに、集団の目的達成に向かう意欲が低下する事に気付かせ、自分の思いと集団の目的に折り合いをつけ積極的に活動しようとする心情を高める。（人間理解・他者理解） ○集団の中の一人として分担された役割を積極的に果たすことで、集団の目的達成にむけて集団の活動が充実することに気付き、主体的に集団の活動を行おうとする心情を育てる。（価値理解）	
教材分析	ねらいに迫る発問（※2） ○最初のえり子さんは、どんな思いで係の仕事をしているのかな。（分析的発問） ◎文男さんが、放課後や朝など自分の時間を使ってまで仕事をするのはなぜだろう。（共感的発問・対象）	

適であるか、どの順序で行うと良いかを十分に検討した（※2）。ねらいに迫る発問に示しているように、ねらいにむけた一貫性のある発問を構成することで、児童に考えさせたい道徳的価値が明確になり理解を深めることができると思う。

(3) 自分のこととして捉える発問の工夫について

永田(2018)は、教材について考える際の発問の立ち位置を四つの区分に分けている。その四つの区分をもとに、発問を作成した（表3）。

教材を自分との関わりで考えるには、もともと他人事である教材を児童が登場人物など当事者の立場に立って、自分のこととして道徳的価値や生き方について考える事が大切だと考える。そこで、登場人物になったり、登場人物に自分自身を置き換えたりし心情の追求を行う。

共感的・投影的発問をする際は、道徳的思考を促すために、対象や時間や

表3 発問の四つの区分・発問（筆者作成）

	立ち位置	発問例
共感的発問	登場人物になって心情を追求する。	・（同じ空間にいる別の）登場人物なら、どんな気持ちか。（対象） ・以前の登場人物なら、どんな気持ちだったか。（時間） ・登場人物が教材とは別の条件だったらどんな気持ちか。（条件）
投影的発問	登場人物に、自分自身（考え方や性格も）を置き換えて、その場に自分がいるとして心情を追求する。	・自分が登場人物だったらどんな気持ちになったか。（対象） ・自分が登場人物と同じ気持ちで生活を続けていたらどんな気持ちになっていたか。（時間） ・自分が教材とは別の条件だったらどんな気持ちだと思うか。（条件）
分析的発問	教材の問題や登場人物の行為を自分の立ち位置で分析し考える。	・なぜ、登場人物はその行為をしたのだろう。（行為の分析） ・本当○○とは何だろう。（価値の分析）
批判的発問	登場人物の行為を自分の立ち位置で批評し考える。	・登場人物がしたことをどう思うか。（行為の批評） ・この○○（価値）をどう思うか。（価値の批評）

条件の視点を移動させながら発問を考える。視点を变えることで、児童は様々な立場から物事を考え、多面的・多角的な見方や考え方が身に付いていくと考える。また、分析的発問で、教材文にある登場人物の行為や道徳的価値を分析したり、批判的発問で角度を変えて批評し行為や道徳的価値について疑問をもちじっくり考えたりすることで、道徳

的価値の理解を深めることにつながると考える。

VI 授業実践

1 主題名 「集団の中で役割を自覚し果たす」(C-16 よりよい学校生活, 集団生活の充実)

2 教材名 「森の絵」 出典 (教育出版)

3 本時の学習

(1) ねらい

○人は、集団の中で自分の思い通りにいかなかったときに、集団の目的達成に向かう意欲が低下することに気付かせ、自分の気持ちと集団の目的に折り合いをつけ積極的に活動しようとする心情を高める。(人間理解・他者理解)

○集団の中の一人として分担された役割を自覚し果たすことで、集団の目的達成にむけた活動が充実することに気付き、主体的に個々の活動を行おうとする心情を育てる。(価値理解)

(2) 授業仮説

○展開前段の場において、分析的・共感的発問をすることで、登場人物の心情や行為を追求し、道徳的価値について多面的・多角的に考えることができるだろう。

○展開後段の場において、投影的発問をすることで、登場人物と自分を置き換えて自分の経験や考え方と照らし合わせながら道徳的価値の理解を深め自分との関わりで考えることができるだろう。

(3) 本時の展開

	学習活動	主な発問○ 中心発問◎	児童の反応	指導上の留意点
導入 5分	1 主題に迫る日常的な場面を提示し、課題意識を持たせる。	○役割を果たすとは、 どういうことですか。 (価値への方向付け) ○学校ではどんな役割がありますか。 (日常場面の提示)	・人の役に立つ事 ・お願いされたことをやる事 ・人のためにやる事 ・係 ・給食当番 ・日直	○日常的な場面を想起させる。
展開 30分	前段 2 資料を読み話合う。 (1)教師の範読を聞き大体的内容を捉える。 (2)最初のえり子さんについて考える。	・えり子さんの役と係は。 ○最初のえり子さんと文男さんは、係の役割を果たしているといえますか。 分析的発問 ○えり子さんは、どんな思いで係の仕事をしているのだろう。 ○みんなもやりたいことができなくて、やる気が下がったことある。	・八月の精 ・道具係 ・果たしている。 ・ちょっと嫌。 ・女王役ができなかったから。 ・エイサー ・リレー ・発表会 	○資料の大体的内容を捉えさせる。 ○挿絵を提示する。 ○思い通りにいかなく、意欲が低下していることを気付かせる。 ○自分の経験と重ねて考えて共感させる。(観察)(ペア)
	後段 (3)文男さんについて考える。 ノートに記入 (4)二人を比べて考える。 (5)自分との関わりで考える。	○文男さんはやりたい役ができたから係の仕事をして一生懸命こなしているのかな。 共感的発問(対象) ◎文男さんが、放課後や朝など自分の時間を使ってまで仕事をするのはなぜだろう。 ○最後どうなれば劇は成功といえるのだろう。 批判的発問(ゆさぶり) ○最初のえり子さんの姿でも劇は成功できるのではないか。 ○文男さんの姿ならどうだろう。 投影的発問 ○文男さんのように今まで自分の役割を果たすことに熱心になったことはありますか。	・そうではない。 ・みんなの迷惑にならないように。 ・自分の役割を果たさないといけない。 ・劇を成功させたい。 ・観客から拍手をもらえたら。 ・他の学年の親にすごいと言われたら。 ・自分で納得していないから成功しない。 ・成功させようと思っていない。 ・満足いくまでやるから成功する。 ・成功させようと思っているから成功する。 ・六年生が修学旅行の時に、委員会活動をやった。 ・係活動で、やりたい係があったけど、第2希望、第3希望と落ちてきてそれを行った。	○対象の視点を変えて違う立場から価値について考える。 ○集団の目的達成のために活動している気持ちを多面的・多角的に考えさせる。 ○価値を実現することで集団としてどんな良さがあるか考える。(ペア) ○役割の果たし方によって自分や集団へ与える影響について考える。 ○個人の力を合わせることで集団の目的が達成される事に気付かせる。 ○教材を自分の経験との関わりで考えさせる。

		○やりたくない役割だったかどうか。 ○みなさんならどのグループに入りたいですか。	・ではする。 ・楽しくできる方法を考える。 ・好きでもないのはできない。 ・みんながやる気のある方に入りたい。	○立場をはっきりさせる。 ○集団を客観的に捉えさせ今後の活動に見通しをもたせる。
終末10分	3 振り返りをする。	○今日の授業を通して、「役割を果たす」について考えたことを振り返ろう。	・成功させるぞという気持ちで。 ・みんなが一致団結して。 ・自分が果たしたことが、みんなに役立てば自分の成功。	○時間を確保し、振り返る時間を十分にとる。

4 評価

- ・集団における自分の役割を自覚し積極的に集団へ参加する良さを考えていたか。
- ・道徳的価値について自分との関わりで考えながら理解を深めていたか。

VII 結果と考察

1 作業仮説（1）の検証

道徳科の授業において、道徳的価値を焦点化したねらいを設定し焦点を絞った授業展開を行うことで、児童が道徳的価値を理解し自分のこととして捉え深く考えることができるだろう。

【結果】

本研究では、まず道徳的価値を焦点化したねらいを設定し（表2）、ねらいに焦点を絞った授業展開を行った。道徳的価値を焦点化したねらいを設定することで、授業展開の中で、児童に考えさせたい価値が明確になり、ねらいに立てた「集団の中の一人」について深める授業展開を行うことができた。初め児童の思考は、（表4※3）個々の活動に対する思いや考えに向いていた。そこで集団の一人としてそれぞれが役割を果たすことによって、集団の目的達成につながることに気付かせるため問い返しを行った（表4※4）。すると、（表4※5）「みんなが同じ気持ちで」の言葉から、個人の力を合わせチームとして取り組んでこそ目的は達成できることに気付いたのが分かる。また、児童の声から、「集団の中の一人として役割を果たすこと」を板書で示し、共有することができた（図2）。

児童Aは、授業の中で「好きでもない役割を果たすことはできない」と自分中心の考えをもっていた。ねらいに迫る焦点を絞った授業展開を行ったことで、児童Aはふり返りに「みんなのためにやって一つのことを大成功させる」と（表5）、個の視点から集団の視点へと視野が広がったと考える。問い返しや板書をもとにした友達の考えを聞くことで「自分の気持ちと集団の目的に

表4 問い返しにおける児童の反応

T 文男さんの姿だったら成功しますか。

C1 成功する。

C2 （自分一人でも）成功させたいという思いがあるから成功する。（※3）

C3 満足な所までやって成功させたい気持ちがあるから。

T 文男さんが頑張れば劇は成功するんだね。（※4）

C4 違う。えり子さんも含めて。クラス全員で

C5 みんなが成功したいという同じ気持ちでやらないと成功しない。（※5）



図2 問い返し前後の板書

大成功させる」と（表5）、個の視点から集団の視点へと視野が広がったと考える。問い返しや板書をもとにした友達の考えを聞くことで「自分の気持ちと集団の目的に

折り合いをつけて積極的に活動しようとする心情」について葛藤し考えを広げることにつながったといえる。また、「みんなのために」や「達成感がある」から、集団の役に立つことで活動が充実することに気がつき、道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉えていることが分かった（表5）。しかし、児童Bのふり返しからは、ねらいを追求する中で考え議論した内容がみられず、ねらいとする道徳的価値を自分との関わりで考えることが十分とはいえない（表6）。

表5 児童Aのふり返し

今日の授業で、役割を果たすとは、みんなのためにやって一つのことを大成功させるという気持ちをもってやらないといけないという事が分かりました。役割は、自分で選んだ道だからそれをやりとげないとだめだということがわかって、役割を果たすとみんなのためにやりとげられるから、達成感があるということも分かりました。

表6 児童Bのふり返し

役割を果たすということは、自分に与えられた責任を全て成し遂げることだということが分かりました。

【考察】

道徳的価値を焦点化したねらいの設定は、授業中の児童の声を的確に拾いそれに対する道徳的価値を追求する問い返しにつながり、道徳的価値を理解し深める上で有効であるといえる。また、道徳的価値を焦点化したねらいを設定したことで、ねらいを基準として、児童が道徳的価値の理解をどのように深めたかを見取ることができ、個に応じた支援へとつなげられた。

2 作業仮説（2）の検証

道徳的価値の理解を深める場において、ねらいに迫るための発問を行うことで、道徳的価値を自分のこととして捉え深く考えることができるだろう。

【結果】

ねらいに迫るため以下のような発問を行った。

発問の区分	発 問	意 図
発 問① 分析的発問	えり子さんは、どんな思いで係の仕事をしているのだろう。 (一つ目のねらいに迫る発問)	えり子さんの思いを分析することで、思い通りにいかなかった時に、集団の目的達成に向かう意欲が低下する事に気付かせる。

発問①を問いかけることで、児童は、えり子さんの気持ちを「ちょっと嫌だと思っている」「なぜなら、女王役（やりたいこと）ができなかったから」と思いについて探り、その思いから「いやだという気持ちが仕事につながっている」と行為について分析し、思い通りにいかない時に意欲が低下することに気付いていた。

発 問② 共感的発問 (対象を変える)	文男さんはなぜ、放課後や朝など自分の時間を使ってまで仕事をするのだろう。(二つ目のねらいに迫る発問)	同じ空間にいる文男さんに視点を移動させ、対象を変えて心情を追求し、役割を果たす時の心情について多面的・多角的に捉えさせる。
---------------------------	--	---

発問②を問いかけることで、児童はえり子さんから同じ空間にいる文男さんに視点を移動させ、「一つでも衣装が足りなかったら、劇ができないから」「みんなそれぞれ役割を果たしているから、自分も役割を果たさないといけないから」「自分だけ頑張らなかったら、頑張っている皆に申し訳ないから」など、文男さんの立場に立って心情を追求していた。二人を比較することで、同じように役割を果たしていても、対象が変われば思いや考え方に違いがあることに気がつき、集団の一人として自らの役割に責任を果たすことが大切だという考えにつながった。

発 問③ 批判的発問 (ゆさぶり)	最初のえり子さんの姿でも劇は成功できるのではないか。	えり子さんの姿を批判的に捉え考える事で、個人が集団に与える影響について考えさせる。
-------------------------	----------------------------	---

発問③の前に成功の姿についてペアで話し合わせた。児童は、自分の気持ちと集団の目的に折り合いをつけ前向きに活動することが成功につながると、自らの経験をもと

に考え始めた（図 3）。そんな中、他の児童から、「成功って個人の成功ですか」と質問がでた。それは、集団の中で一人一人が役割を果たす事で全体の成功は得られると考えている姿だった。その後、発問③で児童をゆさぶり、登場人物の姿（思いや表情）について批判的に捉えさせ、役割の果たし方について全体で考えさせた。すると「一人一人が成功させようという気持ちでやらないと成功しない」と一人一人が役割を前向きに捉え、個人の力を合わせる事が集団の目的達成には大切だと考えを深めていった。

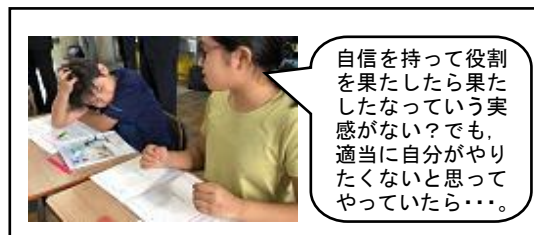


図 3 自らの経験をもとに語る様子

発問④ 投影的発問	みなさんは、文男さんのように今まで自分の役割を果たすことに熱心になったことはありますか。	文男さんに自分を置き換えてこれまでの経験を思い起こさせ自分との関わりで考えさせる。
--------------	--	---

発問④を問いかけ自らを登場人物に置き換えることで、児童は今まで意識せずに行った委員会活動での経験を、資料を通して学んだ価値と関連させ語っていた。また、他の児童も友達の発言を聞いて自らの経験と結びつけ想起し、教材から離れ自分のこととして捉える姿が見られた（表 7）。

【考察】

授業前段で、教材の登場人物の心情や行為について共感・分析・批判的発問を行うことで、道徳的価値の理解を深めることができた。また、授業後段で投影的発問を行うことで、道徳的価値と自分の経験を照らし合わせ、自らも道徳的価値を実現しながら生活をしている事に結びつけ、自分のこととして捉える姿が見られた。道徳的価値を焦点化したねらいに迫る四つの区分を活用し行う発問は、道徳的価値の理解を深め自分のこととして捉えるのに有効である。さらに経験時の心情を追求する問い返しを行えば、より道徳的価値を自分のこととして捉え考えることにつながれると考える。

表 7 投影的発問後の児童の反応

「みなさんは文男さんのように今まで仕事を熱心にした経験はありますか」 C6 六年生が修学旅行に行ったときに、委員会活動で・・・。 C7 あっ！ （友達の発言を聞いて、自らの委員会活動の経験と結びつけ、教材から離れ自分のこととして捉えはじめた瞬間）

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 児童の実態を踏まえ資料分析や価値解釈を丁寧に行い、道徳的価値を焦点化したねらいを設定することで、児童に考えさせたい道徳的価値が明確になり理解を深めることができた。
- (2) 道徳的価値の理解を深める場において、ねらいに迫るための発問や発問構成を吟味し行うことで、道徳的価値を自分のこととして捉え考える姿につながった。

2 課題

- (1) 道徳的価値を自分のこととして捉えさせるために、児童の考えを的確に見取ることができるよう価値解釈がさらに必要である。
- (2) 教材を通して学んだ価値を自分のこととして捉えさせる発問や児童の考えを深めるための問い返しの工夫が今後必要である。

《主な参考文献》

『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』
『「特別の教科 道徳」の授業と評価実践ガイド』
『道徳教育』

文部科学省 東洋館出版社 2017
服部敬一 明治図書 2018
明治図書 2018. 8